

NO. 92

平成15年4月1日発行

SHIMIN PHOTO

市民フォト

KAGOSHIMA

鹿児島





噴水
【斜めの四角】
～西千石町～

CONTENTS

「特集」かごしま文学の風景……	3
クローズアップ……	12
小川景一さん	
学校探訪……	14
武岡中学校	
カメラトピックス……	16
ハロー鹿児島……	18
ALITのみなさん	
私の好きな場所……	20
三雲明美さん	
ふるさと再発見〜文学編〜……	22
島尾敏雄	
あなたのフォトサロン……	24
木下辰雄さん	
よかタイム……	26
黒木美子さん	
街角ウォッチング……	27
永田川(中山町)	
わが家の味じまん……	28
並川さん夫妻	
館のたからもの……	29
ふるさと考古歴史館	
わが町上空今むかし……	30
城山・山下付近	

★表紙写真説明

かごしまメルヘン館に遊びにきた子どもたち。このお話、知ってるよ。童話とメルヘンの世界に、心が踊ります。

特集

かごしま文学の風景

多くの文学の

舞台になつている鹿児島は、

作家ごとに違う顔を見せ、

その創作に影響を与えてきた。

名作を生んだ近代作家たちや

現在市内で執筆活動をする人たちがみる

鹿児島は、

どんなところなのだろうか。

鹿児島島の文学の

風景を訪ねた。

桜島・古里の海岸

作家の足跡をたどり、原風景を訪ねる

林芙美子ゆかりの地へ

「鹿児島ゆかりの作家で、私に最も影響を与えた人は林芙美子です」と語る鹿児島市在住の作家、相星雅子さんと林芙美子のゆかりの地を訪ねた。

相星雅子さん

文芸誌「小説春秋」編集発行人、日本ペンクラブ会員、かごしま近代文学館「文学創作講座」講師。著書に「華のときは悲しみのとき - 知覧特攻おばさん鳥浜トメ物語」など。南日本文学賞、鹿児島県芸術文化奨励賞受賞。



桜島が、作家林芙美子の原型をつくった

「十数年ぶりです。当時は文学碑だけで銅像はなかった。周辺も整備されてとてもきれいになりましたね」

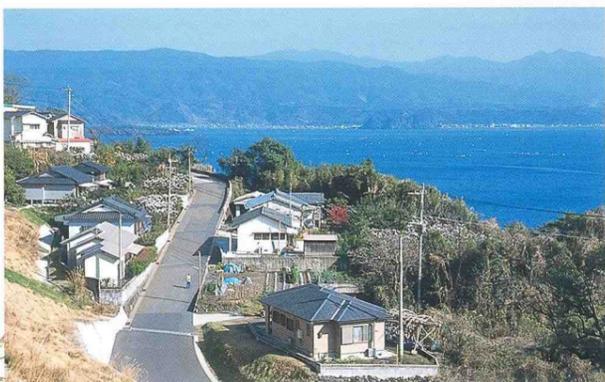
鹿児島市在住の作家、相星雅子さんは林芙美子の銅像を眺める。

「彼女はとても小柄だったそうです。私、なんとなく似ていませんか」

林芙美子は、1903(明治36)年、福岡県北九州市門司区(一説に山口県下関市)に生まれる。母の本籍地が鹿児島県鹿児島郡東桜島村古里だったことから、林芙美子の原籍もこの地になった。6歳のときから行商人の養父とともに九州各地を転々とし、10歳のころには一人で母の故郷・鹿児島に

預けられる。「彼女にとって、鹿児島は楽しい思い出が残る故郷というわけではなかった。しかし、そのときの体験が彼女の作家としての

の原型を形づくったと思います。「鹿児島は嫌いだ」ということになって、逆にしっかりと鹿児島に根を張っていたのではないのでしょうか」



古里町。林芙美子が歩いた道は、どのあたりだろうか。

戦後の作品の中に真の林芙美子をみる

「林芙美子は、貧しい生活とたたかいながら世情をみつめました。彼女が書くものはいつも庶民。そこが私は好きなんです」

相星さんにとって、林芙美子

の作品は、自らの作家としての原点だという。

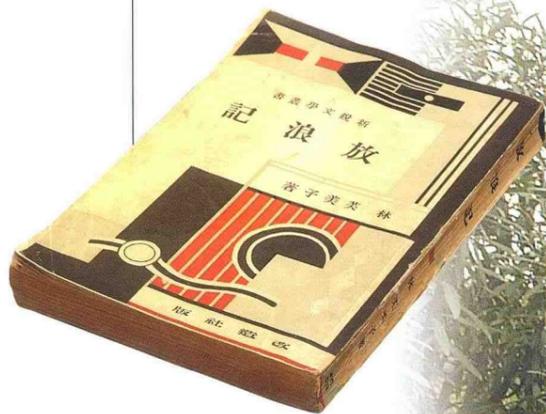
「彼女は戦後、昭和26年に亡くなるまでの短い間にも、多くの作品を残しています。特に、戦争が女たちに残したつめ跡

を描いたものは素晴らしい。私はそれらの作品の中に彼女の真実をみます」

死後50年余りたった今でも、林芙美子の作品は愛され続けている。

放浪記(初版本)

1930(昭和5)年、改造社
貧しい放浪の日々を送りながらも、強く生きていこうとする主人公を描いた自伝的小説。



雄大な桜島、鹿児島特有の風土が数々の作品を生んだ

鹿児島はなつかしい『故郷もどき』 向田邦子

向田邦子は1929(昭和4)年、東京に生まれる。10歳のときに保険会社につとめる父の転勤で鹿児島市に移り、山下小学校に通う。

晩年、当時を思い返して、「長く生きられないと判ったら鹿児島へ帰りたい。(略)少女期の入口にさしかかった時期をすこしたせいか、どの土地より印象が強く、故郷の山や河を持たない東京生れの私にとって、鹿児島はなつかしい故郷もどきなのであろう」(『鹿児島感傷旅行』)と書いたほど、

思い出深い2年余りを過ごす。



山下小学校

「この時の私は、赤いランドセルを背負った、蚊トンボのようなすねをした四十年前の小学生であった」(『鹿児島感傷旅行』)



与次郎ヶ浜(昭和34年)

「天保山は、鹿児島市随一といつてもいい海水浴場であった。前に立ちはだかる桜島。ひろがる錦江湾。」(『鹿児島感傷旅行』)

鹿児島での体験が「梅崎春生」

戦後派作家としての出発点だった

梅崎春生は1915(大正4)年、福岡市に生まれる。29歳のころ、海軍に召集され、暗号特技兵として終戦までの1年あまりを鹿児島で過ごした。

このときの体験をもとに、小説『櫻島』を書き、1946(昭和21)年発表。一躍、戦後派作家として認められる。

1955(昭和30)年

に『ボロ家の春秋』で直木賞を受賞。その後一時低迷するも、1963(昭和38)年、『狂ひ風』を書くころから復調、この年に鹿児島を再訪する。2年後、この旅の経験を背景にした小説『幻化』を発表、遺作となる。



焦土となった鹿児島市

「鹿児島市は、半ば廃墟となっていた。鉄筋混泥土の建物だけが、外郭だけその形を止め、あとは瓦礫の散乱する巻であった。」(『櫻島』)

(昭和20年・平岡正三郎氏撮影)



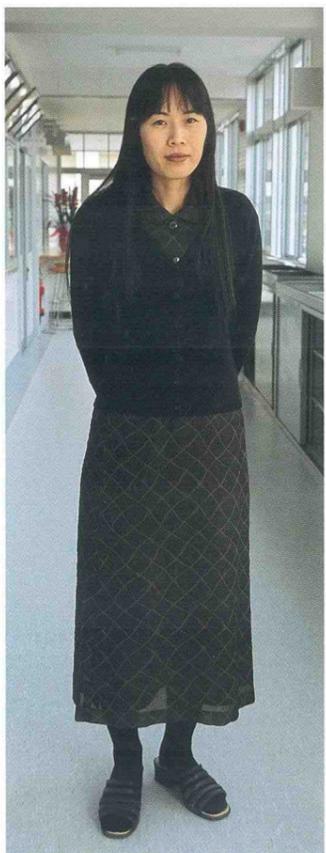
袴腰からみた桜島

「崖の上に、落日に染められた桜島岳があった。私が歩くに従って、樹々に見え隠れした、赤と青との濃淡に染められた山肌は、天上の美しさであった。」(『櫻島』)



鹿児島という土地で書きつづけること

文学に携わる人たちは、どういった意識で鹿児島をみて、この地で書いているのか。市内で執筆活動が続ける2人の小説家はこう語る。



鳥居 佐智子さん
第1作「たとえば空をうたう日」で、1999年の南日本文学賞の大賞を受賞。市内の高校で国語教諭も勤める。

旅人の目で

SACHIKO TORII
鳥居 佐智子

梅崎春生や島尾敏雄など、鹿児島を土台とする作家のほとんどは県外の人ですよね。旅人のような視点で客観的に鹿児島をみたときに、新しい発見があるのではないのでしょうか。私自身、学生時代は関東に、昨年の3月まで徳之島にいました。その土地の生活者

になる前の感覚というのを大事にしています。鹿児島はまったたくの田舎でも都会でもない。だからこそ、今、何か書けるのではないかと思います。



森田 一正さん
「ホームクルス」で1989年の南日本文学賞を受賞。芸誌「小説春秋」同人、鹿児島県「文芸かごしま」の編集委員。

風穴をあける

KAZUMASA MORITA
森田 一正

鹿児島も全国的なレベルに近づきつつあります。あと一歩というところでしょう。しかし一方で、昔からの社会的通念から脱却できないところもあります。そういったものに風穴をあけることが必要じゃないでしょうか。

私は同人誌の中で作品を発表しています。同人誌を批判する人もいますが、互いに切磋琢磨して才能を伸ばす場であると思います。

文学を学び書くことは自分を表現する手段

かごしま近代文学館で行われている「文学創作講座」と「文学講座」は、毎回定員を上回る応募があるほどの人気講座だ。

相星さんは「スタートこそ遅れたけど、鹿児島は南国の情熱と才能を持っている。ダイヤモンドの原石のように、磨いていくことが大切」と埋まった宝を発掘するかのよう、それぞれの良さを発見する。

文学創作講座は、毎月の締め切りまでにエッセーや短い小説、詩を書き、講師の相星雅子さんに提出する。相星さんが作品すべてに目を通し、これはと感じたものを講座で作者に発表してもらった。



文学講座は、講師の石田忠彦さん（鹿児島大学法文学部教授）が、戦後の作家の中から一人にスポットをあて、作家の作風から世界観まで読み解く。

石田さんは、「退職後や子育て、家事が一段落して、再度勉強したいという人が、受講者のほとんど。みなさんとても熱心だ」と語る。石田さんの軽妙な講義に、受講者の間からは何度も笑い声も聞かれる。



脈々と受け継がれてきた風雅の道

短歌の月刊誌

「にしき江」の創刊

は、大正3年。全

国で3番目に古い歴史を

持つ。会員は約1000人。鹿

児島や宮崎をはじめ、全国各

地から短歌が寄せられる。

代表の鶴田正義さんは、「に

しき江」と同じ大正3年生ま

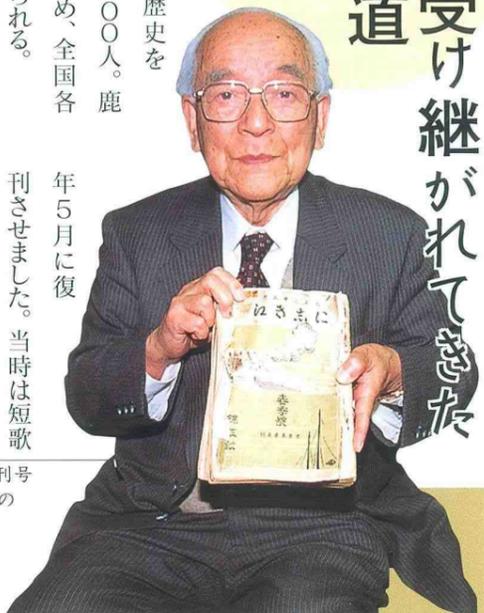
れ。自らと同じ年数だけ受け

継がれたこの短歌誌に、格別の

情を抱く。

「戦時中、一時中断せざるを

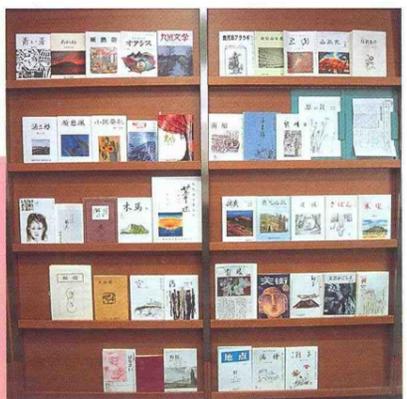
得なくなりましたが、昭和21



年5月に復刊させました。当時は短歌どころではない世の中でしたが、「やらなきゃいかん」という皆の強い意志で復活できたのです」

歌誌「にしき江」創刊号（大正3年）と代表の鶴田正義さん

「にしき江」は今年3月で1000号を迎えた。



県内の同人誌

かごしま近代文学館には、小説から詩、短歌、俳句まで40冊以上の同人誌が寄せられている。



市長に聞く 文学的土壌を さらに豊かに

子どもたちに文学への興味を
今年で5周年を迎えたかごしま近代
文学館・かごしまメルヘン館は、鹿児島ゆ
かりの文学者たちを顕彰し、鹿児島に文
学の息吹を呼び起こすためにつくりま
した。

館は、近代文学館が「静」、メルヘン館が
「動」という役割を持たせています。この二つ
を組み合わせることで、大人だけではなく、
子どもたちにも楽しみながら文学の世界へ

の関心を持ってもらえるようにしました。

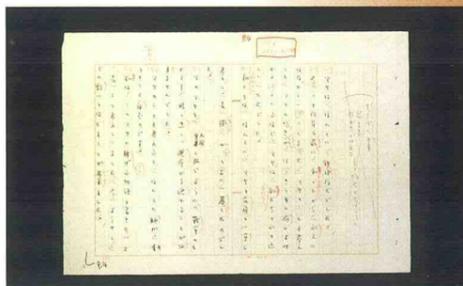
「母と子の20分間読書運動」の 精神は、今も生き続けている

市制100周年を記念し、鹿児島から
児童文学を発信するために創設された椋
鳩十児童文学賞は、今年で13回目を迎え
「児童文学の芥川賞」といわれるまでになり
ました。うれしいことは、受賞者の方々が、
その後も素晴らしい活躍をされていること
です。

鹿児島には椋鳩十先生が提唱された

「母と子の20分間読書運動」という全国に
誇れる土壌があります。市立図書館の入
館者数と図書貸し出し数の多さに加え、お
母さんが子どもたちに絵本の読み聞かせを
している光景をみると、この運動の成果が
今も生き続けていることがわかります。

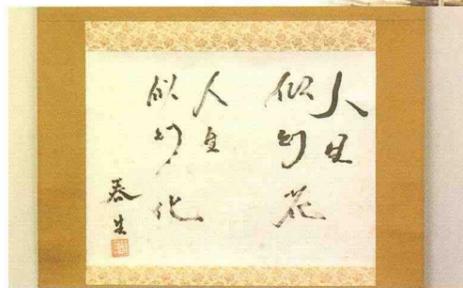
素晴らしい作家たちのゆかりの地であ
る鹿児島。今を生きる私たちは、これまで
育まれてきた文学的土壌を、さらに豊か
にしていかなければなりません。椋鳩十児
童文学賞の受賞者が本市から誕生する
日もそう遠くないのではないのでしょうか。



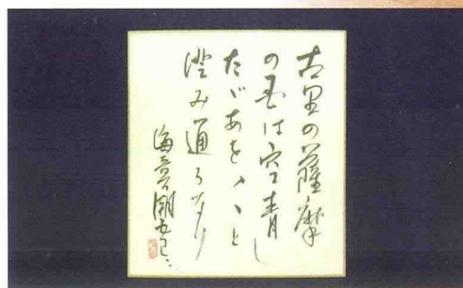
椋鳩十 原稿
「マヤの一生」



林芙美子 遺品
うちわに描かれた自画像



梅崎 春生 掛軸
「人生似幻花 人生似幻化」



海音寺 潮五郎 色紙
「古里の薩摩の国は空青し
たゞあをあとと澄み通るなり」

意欲にこたえる。

併設しているかごしまメルヘ
ン館でも、「えほんのじかん」「メ
ルヘンおはなし会」など開き、子
どもたちに絵本、ひいては文学
に興味を持ってもらえるよう
進めている。

「過去のすぐれた作家、作品
を紹介して、未来のための刺激
を与える」…一つの区切りを迎
えたかごしま近代文学館は、さ
らに市民の知的好奇心を満足
させ、鹿児島の文学の拠点に
なるよう目指していく。



向田 邦子 遺品
世界一周をしたときのコート

1つの区切りを迎えた かごしま近代文学館

かごしま近代文学館は、今
年1月で開館から5周年を迎
えた。

展示の特色の一つは、1階常
設展示室に「作家の心象風景」
のコーナーを設け、映像とナ
レーションでその日常生活や代
表作品の一場面を紹介してい
ることである。

2階の文学サロンには、パネ
ルの「鹿児島文学地図」とタッ
チパネルの「鹿児島文学探索」
があり、県内各地にゆかりの作
家・作品・文学碑などを検索で
きる。常設展示していない館所
蔵資料は、館内のパソコン端末
によって検索もできる。

また、「文学創作講座」や「文
学講座」、年2回行う企画展
などを開催し、学びたい市民の

小川 景一さん

略 歴

昭和30年生まれ。昭和63年デザイン事務所設立。平成8～11年中国桂林市に青年海外協力隊員として赴任。平成11年、中国国家友宜賞受賞。昨年から2年連続デザインフェアコンペKISC表紙部門最優秀賞受賞。霧島アートの森やサンエールかごしまのシンボルマークなど制作多数。



昨年指導した美術学部の学生たちに囲まれて

「中国人は自分に非があつても正当化しますね。本気で向かつていけないと改めないんです。帰ったら疲れてベッドにバタンですよ」という小川景一さん。中国桂林旅游学院美術学部で1年間に6カ月教壇に立つ。

「1年に半年の大学教授

昨年から、中国へ年2回、デザインを教えに行っている。1回当たりの滞在は3カ月ほどだ。1クラス30人。もちろん授業は中国語だ。難しそうだが指導方法が面白い。30人を3、4人の班に分

け、模擬デザイン会社を起こさせる。「朝一番に社長全員とミーティング。その後社長は班員に今日の仕事を指示します。彼らが社会に出てデザイン事務所です。彼らに即戦力になればと思って。実際に外で営業しますよ。もうかつてるかはわかりませんが」

日本より個人主義で自分の非を認めない学生たち。体当たりでいかないと認めさせることができない。

「学生と意見がぶつかったとき、自分のテンションが低かったら私の方が授業をボイコットしちゃいます。後でそろそろ謝りに来ますよ。あと、どっちが正しいか」

いかをみんなで投票したりします。9割方私の勝ちです。メンツとの戦いなので言葉じゃだめなんです。一度やりあつておけば、後は楽ですよ」

「2度の入院で放浪の旅へ

中学では剣道さんま。常に県でベスト4に入つた。高校でも剣道を続けたが、先輩が怖くて辞められなかった。すると腎炎で1年入院。退院後、担当医からのスポーツ禁止令のため、次に好きだった美術部へ。高校美展では画に買い手があつた。しかし、大学は本人も選択を間違つたという法学部。まもなく再入

院した。「入院中、行つたこともないのに、小笠原、インドなどの風景の夢をよく見られます。退院したらすぐ全国放浪の旅に出ました。体が熱くなって言うときかなかつたんです。就職活動はしませんでした。また放浪の旅です。スケッチブック持つて。台湾、香港、タイ、インド。帰国してデザイン事務所に入つたら徹夜の連続で、仕事に一生懸命になってました。でも、海外に住みたいといつも思つてました」

「偶然が重なり 水墨画のメッカへ

会社を設立し、経営が順調になつたころ、そろそろ海外へ動けるのではと思

長かった放浪の旅も 桂林で終わりがかな



い始めていた。

「入脈もないのに上海に行きました。たつた3日の滞在です。何も得るところなく帰国しましたが、列車の中で、青年海外協力隊募集のポスターを見つけたんです。これだと思ひました」

国際協力事業団に電話すると、中国からデザイン指導の要請があるという。水墨画への興味から中国に住んでみたかった小川さん。普段から事務所に中国語放送を流しつ放しにするなど、準備に余念がなかった。中国語ができるデザイナーはそうはいない。

「問題は39歳までという年齢制限だつたんですが、なんと試験日は40歳の誕生日の2日前。絶対に行けると確信しましたね」

青年海外協力隊で赴任したのは、水墨画のメッカ「桂林」にある今の美術学部。当時はボランティアだったが、今は大学教授だ。

「桂林は山水の美しいところ。トレッキングをしながら水墨画だけを描いて暮らせるようになります」

長い放浪の旅は桂林で終わりそうだ。



子どもの発達や遊びを学んだ技術・家庭の時間。
武岡幼稚園で実習した



創立 昭和63年4月 生徒数 461人(平成15年3月1日現在)

学校探訪

武岡中学校



校訓 自立・友愛・創造



立志式を記念して陶芸に挑戦



クラスマッチ。
男子は雨の中サッカー、
女子はバスケットボール



一人一鉢運動。パンジー、
サイネリアなどを育てた

2月1日～3月2日
千葉ロッテマリーンズ
鹿児島キャンプ

千葉ロッテマリーンズとジュビロ磐田が、鹿児島で春季キャンプを行いました。熱心に練習に取り組む選手らに、市民から温かい声援が送られました



2月2日～11日
ジュビロ磐田
鹿児島キャンプ



2月11日
メルヘンまつり

かごしまメルヘン館開館5周年を記念して開催されました。約2,000人が館を訪れ、からくり人形の実演や紙芝居などを楽しみました



1月7日
同報無線戸別受信機運用開始式
災害情報をいち早く知らせるために、東桜島地区の全世帯に同報無線の戸別受信機を設置しました

1月24日
鹿児島地区合併協議会設置

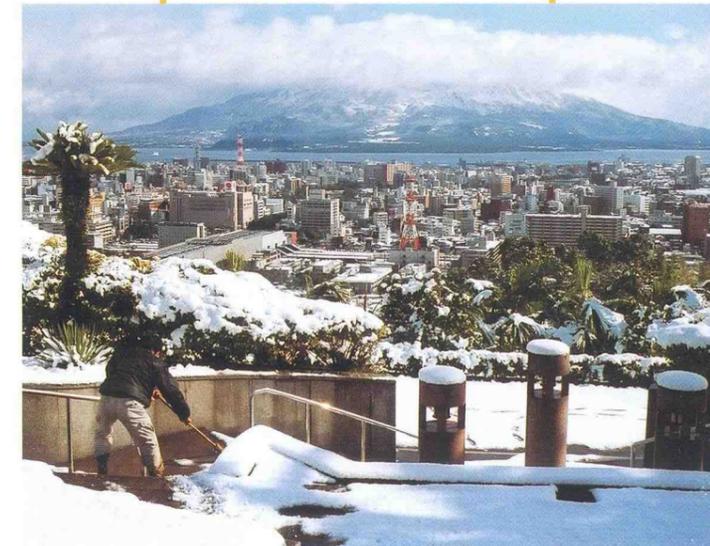
鹿児島地区合併協議会を設置するとともに、鹿児島市役所に事務局を開設しました



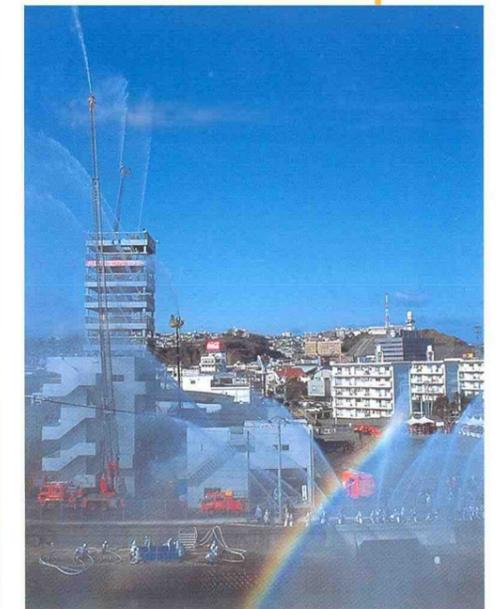
1月31日
第1回鹿児島地区合併協議会

鹿児島地区1市5町(鹿児島市、吉田町、桜島町、喜入町、松元町、郡山町)の初会合が行われ、合併の方式は鹿児島市への「編入合併」、合併後の名称は「鹿児島市」とすることなどが決定されました

2月5日
新世紀100年プロジェクト提言
平成13年から約1年にわたり、市民が長期的な視点に立って鹿児島市のあるべき姿を展望してまちづくりの夢を語り合い、まとめられたプロジェクトを市に提言しました



1月5日 16年ぶりの大雪
市内では6センチの積雪を記録しました



1月6日 消防出初式
新栄町の消防総合訓練研修センターで開催。消防職員と消防団員約950人と35台の車両が参加して行われました



2月23日
ボランティアフェスタ

「はじめよう! “ちょボラ”(ちょっとボランティア)から」を合言葉に、ボランティアセンターで行われました



3月9日
不発弾撤去作業

市宮柳町住宅の工事現場で発見された不発弾の処理は、約4,300人の住民が避難し、無事終了しました

鹿児島に 吹き渡る 異文化の風



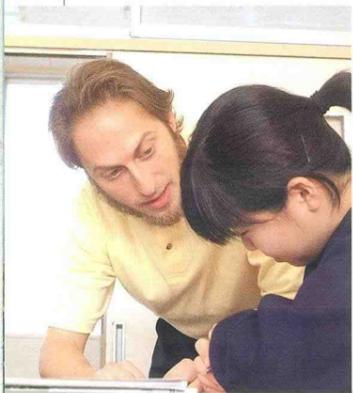
10人の友人たち

ALTとは、Assistant Language Teacherの略で、外国語指導助手のことである。現在本市には10人のALTがいて、自分の受け持ちの市立中学校や市立高校で英語の授業の補助をしている。任期は1年で、更新して最長3年まで務めることができる。

アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダからやって来た彼ら。鹿児島の印象、仕事、生活、これらの夢など語ってくれた。

美しくフレンドリーな鹿児島

鹿児島市は美しいまち。みんなが口をそろえた。中には「日本で一



番美しい」という人も。錦江湾に浮かぶ桜島が人気を集めていて、あたたかい市民や食べ物も気に入っているようだ。バスから来たガーマニーさんは「錦江湾がスワン川みたい、同じオーストラリアのクリードさんも「生まれ故郷のメルボルンを思い起こさせる路面電車があるのがいい」と満悦だ。

英会話は当たって くだける

ALTの仕事には、皆やりがいを感じている。英語ばかりではなく、日本以外の文化やものの考え方を教えるのも大事と考えている。学校や地域の国際化という観点から、彼らは自分たちの役割を重要なものと解している。

生徒たちが熱心に勉強に取り組んでいることは、概して驚いたという。でも、やはり生徒たちはシャイ。間違うことを恐れずにつづかつてきて欲しいと思っている。「間違うことでうまくなる。教科書ばかりでは

得られないものがある」「クリードさん。日本人の弱点はお見通しだ。

鹿児島の生活を満喫

鹿児島での生活は皆一様に楽しんでる。ニューヨークからきたマラックさんは「大都市の楽しみを味わえずに寂しく思うこともある」と言うが、豊かな自然にふれる、温泉、旅行、サイクリング、生け花、空手とさまざまだ。

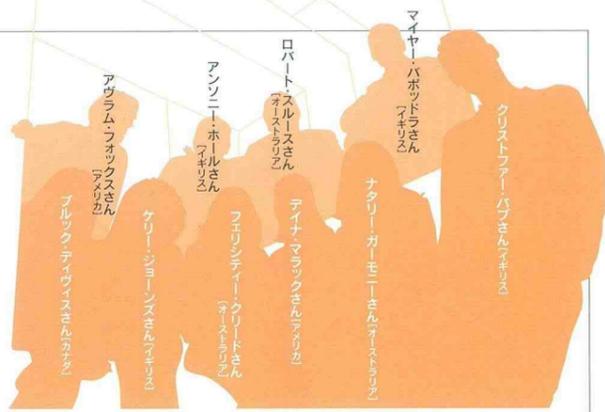
特に、昨年12月かわいいういの子が生まれたばかりのスルースさん、「子どもといっしょに遊ぶのも、ギンギンに冷えたビールを飲むのも幸せ」。ささやかな喜びは万国共通である。

鹿児島を忘れないで

本市で奮闘中のALTの皆さん。今後、もつと世界を見るため旅をしたいという人もいれば、日本と母国を結ぶ仕事をしたい人も。ホー

ALTのみなさん
Assistant Language Teacher

Hello
KAGOSHIMA



ルさんのようにパイロットを目指している人もいます。

いずれ鹿児島を去るが、短い間ながらも、濃密なひとときを送る。鹿児島を存分に堪能していただきたい。そして、生徒たちが異文化を肌で認識するよすがとなつてほしい。これからの活躍を祈る。





20数年ぶりに訪れた多賀山から 桜島が見えるような気がした

多賀山公園

多賀山公園から見える景色が印象に残っています。幼いころ多賀山の裏手に住んでいて、このあたりが遊び場だったんですよ。多賀神社の境内を駆け上がり鳥居を抜けて、祇園之洲の砂浜や海に浮かぶ桜島を見てみると、なんだか気持ち落ち着いてきて、パワーをもらえるような気がしていました。

幼いころはあんまり足は速いほうじゃなかったですね。運動会の駆けっこでは、いつも真ん中から後ろだったんじゃないかな。

私の好きな場所



でも体を動かすことは大好きで、運動会が楽しみでした。

高校から盲学校に入り、全国身体障害者スポーツ大会に出場したら優勝したんです。そのころは音が頼り。ゴールで鐘を鳴らし、その音に向かって走っていました。体育館の中で練習すると、音が反響するのでもうまく走れなかつたりしましたね。

今は伴走者である鹿児島大学陸上部の平井達雄さんと一緒に走っています。ひもで輪っかを作り、その両端を持って全力疾走するんです。スタートの時とか息が合わないと転倒したりするんですが、平井さんとは息もピッタシです。

これからの目標は、来年アテネで開催されるパラリンピックに出場すること。右足首をねんざして1年ぐ

らい前から思うように走れませんが、ウエイトトレーニングやジョギングなど、できることを少しずつ積み重ねて選考会に備えています。短距離をするようになって、気持ちにゆとりができて細かいことに動じなくなつたような気がしますね。

あつ、レンガ敷きの小道が途切れたんですね。この土の感触は昔と変わらないな。石の階段の段差もこんな感じでしたよ。

昔はうつそうとしていたのに、今日は明るく感じます。風も温かくて春を感じますね。下の公園のほうから子どもたちが遊んでいる声も聞こえる…。そういえば子どものころ、父が天体望遠鏡を持ってきて、ここから一緒に金星を見たことも大切な思い出の一つですね。

20数年ぶりに多賀山公



全盲のスプリンター 三雲 明美さん

1959年鹿児島市生まれ。先天性の目の病気のため、徐々に視力が弱まり20代後半に視力を失う。3年前から本格的に短距離走に取り組み、以降、全国大会で優勝、国際大会でメダル獲得など、活躍を重ねる。全盲女子100メートル・200メートル走の日本記録保持者。

園に来てみました。出かける前に、なかなか今日は桜島が見えるような気がしたんですよ。不思議ですね。

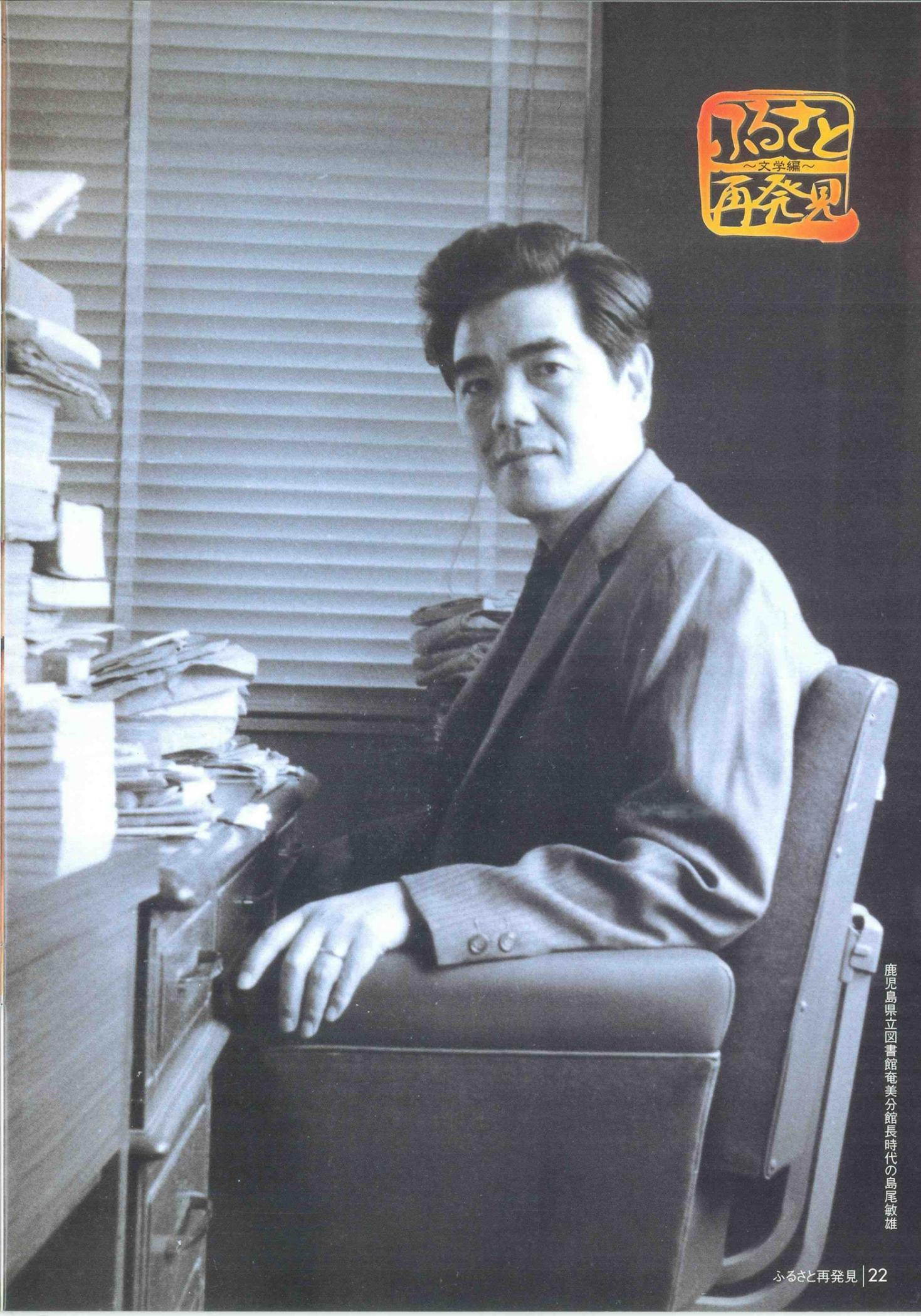


幼いころ駆けまわっていた多賀神社の境内

「取材メモ」

同行していただいたお母様の三雲さん評は「負けず嫌い」。しかし、取材はとても明るく楽しい雰囲気のおかげで進められた。伴走者の平井さんが加われればもつとにぎやかになって、まるで3人で漫才をしているようになるとか。

撮影の途中、道行く人に「テレビ見ました。がんばってください」と声をかけられ、笑顔で会釈する三雲さん。背筋を伸ばし、うつむくことなくゆつくりと歩く姿が印象的だった。



鹿児島県立図書館奄美分館長時代の島尾敏雄

出発は遂に訪れなかった

島尾敏雄は、大正六年、横浜市生まれ。梅崎春生、野間宏など第一次戦後派作家に続く第二次戦後派作家の一人として活躍した。昭和十八年、九州帝国大学を繰り上げ卒業し海軍予備学生を志願、一般兵科に採用され、翌十九年に第一回魚雷艇学生となった。同年、第十八震洋隊の指揮官となり、奄美諸島加計呂麻島の呑之浦の基地ですぐに出勤できるよう準備(即時待機)したまま終戦を迎える。「震洋」は戦前唯一の水上特攻艇であった。

このときの体験が、戦後文学の代表作の一つとなった「出発は遂に訪れず」(昭和二十三年)を生んだ。昭和二十年、八月十三日の夜「私」の隊は、防備隊の司令官から特攻戦発動の電信による指令(信令)を受け、即時待機の状態が発進の命令を待つ。発進の合図がなければ、艇の船先につめ込んだ二

百三十キロの爆弾を持った特攻艇が、目標の敵艦船に向かって出撃するのである。しかし、「死の手のひらの上にのぼったのに理不尽にも猶予を与えられ」たまま、翌十四日出撃は完了せず繰り越されてしまう。その夜、防備隊から十五日正午に部隊指揮官は集合するように連絡があり、翌日「私」は日本の無条件降伏で戦争の終わったことを

昭和三十三年から五十年までは県立図書館奄美分館長を務めている。昭和六十一年、六十九歳で亡くなるまで、県内では指宿市、加治木町、鹿児島市の吉野町や宇宿町でもしばらく暮らしている。

昭和六十三年、加計呂麻島の呑之浦に建立された島尾の文学

かごしま近代文学館

島尾敏雄

文かごしま近代文学館

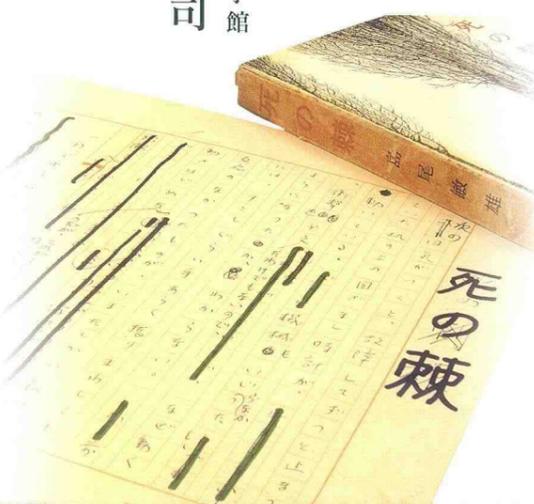
篠原 良司

知らされる。「出発は遂に訪れ」なかったのである。

昭和二十一年、島尾は加計呂麻島で出会ったミホ夫人と結婚した。その後、昭和三十年、ミホ夫人の健康がすぐれないため、島尾は家族とともに東京から名瀬市に転居し二十年間奄美で暮らした。

記念碑には、ミホ夫人の清書により「出発は遂に訪れず」の冒頭の次の一節が美しい文字で刻まれている。

もし出発しないなら、その日も同じふだんの日と変わるはずがない。一年半のあいだ死支度をしたあげく、八月十三日の夕方防備隊



当館が所蔵している島尾の資料は447点。「死の棘」の直筆原稿や初版本、遺品のネクタイや日記などがある。そのほか、ライブラリーでは島尾の関連図書の紹介も行っており、ミホ夫人や令息島尾伸三氏の作品なども閲覧できる。



ミヤコフスレ 鹿児島



ミヤマキリシマ 霧島

「開 花」

写真: 木下 辰雄さん



バラ 鹿屋



シダレウメ 阿久根



バラ 鹿屋

創作木目込人形



江戸時代に
京都賀茂神
社に仕える人

が始めたという木目込人形。丸みを帯
びたやさしい雰囲気が心を和ませます。

よかTIME

黒木美子さん

木目込人形との出会いは

10年ほど前、先生が作られた
酉の木目込人形を見て、「和」の
たたずまいに心ひかれました。絹
など本物の素材を使つてただ一
つの人形を作れるところにも魅
力を感じています。

どんな創作活動を

毎月、メンバーが集まつて先生
の指導のもと創作に励んでいま
す。みんな熱中して黙々と作つて
いますね。

一昨年は市内のデパートで展
覧会も開きました。

作り方は

ボディは桐の木のおがくずを
しょうぶのりで固めたものです。
布を張り、布地の端を彫り込ん



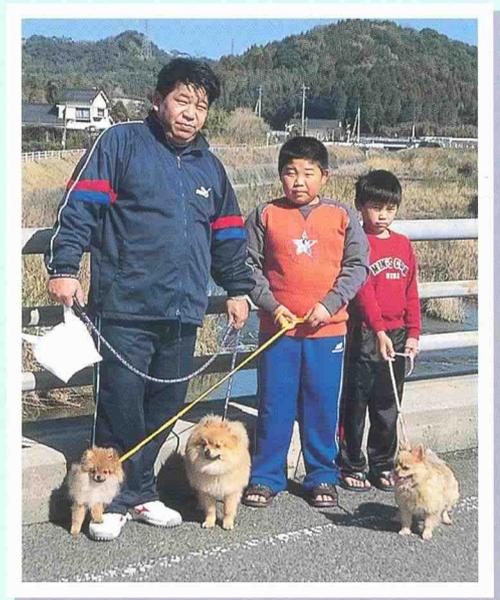
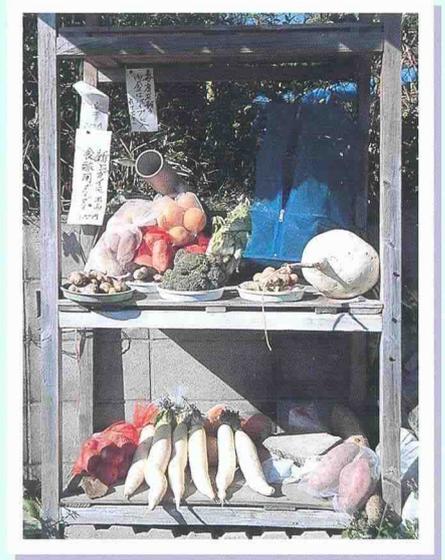
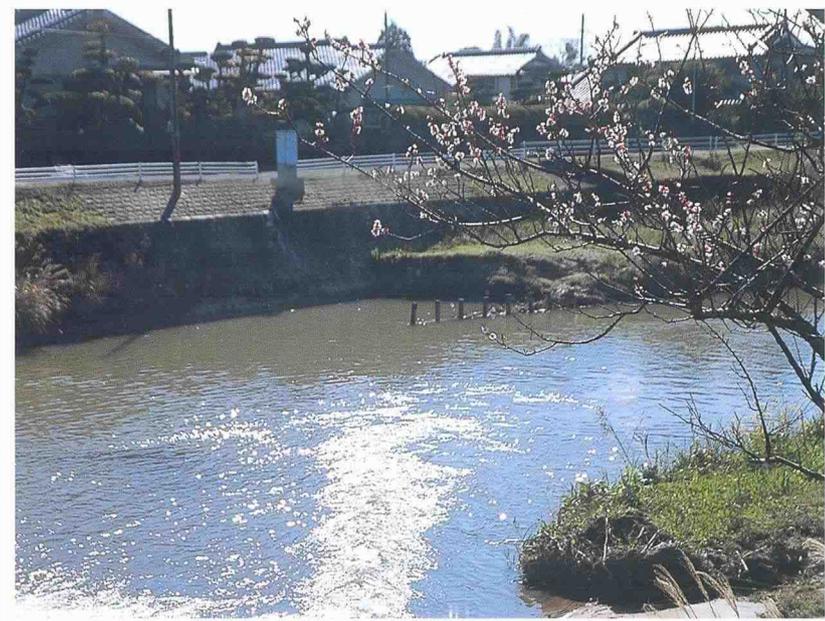
だ溝に埋め込みます。これが意
外と力が入るんですよ。全体の
でき上がりをイメージして、布地
の組み合わせを考えていきます。

お友だちにも好評だとか

毎年11月になると次の年の干
支の人形を作り始め、友人にお
歳暮代わりに贈ります。その人
を思い浮かべながら一つ一つ違う
ものを作ります。贈るとき、人形
を並べて選んでもらうのですが、
自分が思っていたとおりのものを
選んでもらえたときはうれしかつ
たですね。

街角

ウォッチング
～永田川(中山町)～



味が家の味

「ちらし寿司」
「イチゴのアイスクリーム」

並川さん夫妻
[薬師二丁目]



家庭の数だけ食卓があり、家庭の数だけ語らいがある。テーブルに広げられた自慢の料理は、家族の笑顔を演出する。

鹿児島市内におよそ23万5千世帯。一人から大家族まで食卓の風景はさまざま。わが家の味は家庭をどのように彩っているのだろうか。

「二人暮らしにはちよつと大き過ぎるテーブルを買っちゃつたんですけど」。そのテーブルに並べられていく料理の数々。

2年前、剛さんの妹さんがリーダーを務めるバレーボールクラブに香織さんが加入したことが出会いだつた。昨年7月結婚。その後もう一回夫婦でクラブに参加している。

もう一つ、共有する楽しみがある。「二人とも食べたり、飲んだりするのが大好き」ということ。おいしいカクテルを作りたいと思つたら、二人で碎氷機を探し歩いたり、グレープフルーツが体にいいと聞いたら、絞りながら飲んでテーブルの上に皮の山ができた。

また、香織さんは料理学校に通い、テレビで見たり、人から聞いては自分で作つてみる。独自のアレンジも加わり、時折、並川家の食卓にはこの世でただ一品の料理が登場する。絶品が誕生したり、たまに「あれっ？」という味があつたり。

でも、「食に詳しいし、よく食べてくれるから作りがいがあつた」と香織さん。「作ることは彼女に任せていますが、私の実家は旅館なので、食材や作る手間はよく分かる」と剛さん。ちらし寿司をいただいた。華やかな色合いに上品な甘さ。白ごまを煎つて混ぜ込むことで一段と風味が増している。

イチゴのアイスクリームは口に入

今回のレシピ

「ちらし寿司」

1. 材料(4人分)

- 米3カップ、昆布5cm角
- 具[干しシイタケ、レンコン、タケノコ、ニンジン、かんぴょう]適量
- A[しょうゆ大さじ3、酒大さじ2、みりん大さじ1、砂糖大さじ2]
- 合わせ酢[酢1/2カップ、砂糖大さじ1と1/2、塩小さじ1] ●白ごま
- 飾り用[大葉、イクラ、かまぼこ、錦糸卵、のり、でんぶ]適量

2. 調理手順

- ①米は、昆布を入れて炊く。
- ②干しシイタケは軸をとり、水1カップに20分つけ、戻す。レンコンは皮をむき、いちよう切りにし、酢水にさらしておく。ほかの具は細かく切る。
- ③シイタケの戻し汁にAを入れ、煮立てる。具を入れ、煮汁がなくなるまで煮る。
- ④①と合わせ酢ですし飯を作り、少し冷ました③と白ごまを混ぜ込む。飾りの食材を盛りつけてできあがり。



「イチゴのアイスクリーム」

1. 材料(4人分)

イチゴ200g、生クリーム1カップ、砂糖50g

2. 調理手順

- ①イチゴは洗ってヘタを取り、半分に切って、切った面を上にして冷凍庫に1~2時間入れる。
- ②①と砂糖をクッキングカッターにかけ、30秒したら、生クリームを入れ、さらに30秒かける。
- ③金属製の容器に入れて冷凍庫に入れ、3~4時間冷やし、固める。



れると、生のイチゴの新鮮な味がふわつと再現されて、溶けていく。中学校の先生で、剣道部の顧問でもある剛さんが成長して、並川家に集うこともある。「多いときは12、13人。みんなでわいわい食べたり、飲んだり。本当に楽しいですよ」につこり笑う二人。「ちよつと大き過ぎるテーブル」でも足りなくて、もう一つつなぎ、一面に料理を並べる。そんな日は、いつまでもにぎやかな笑い声が絶えることがないそうだ。

ふるさと考古歴史館

「だい つ き さ ら が た ど き台付皿型土器」

縄文人の祈りと祭り



私たちの祖先、縄文人たちは、どんな暮らしをしていたのでしょうか。

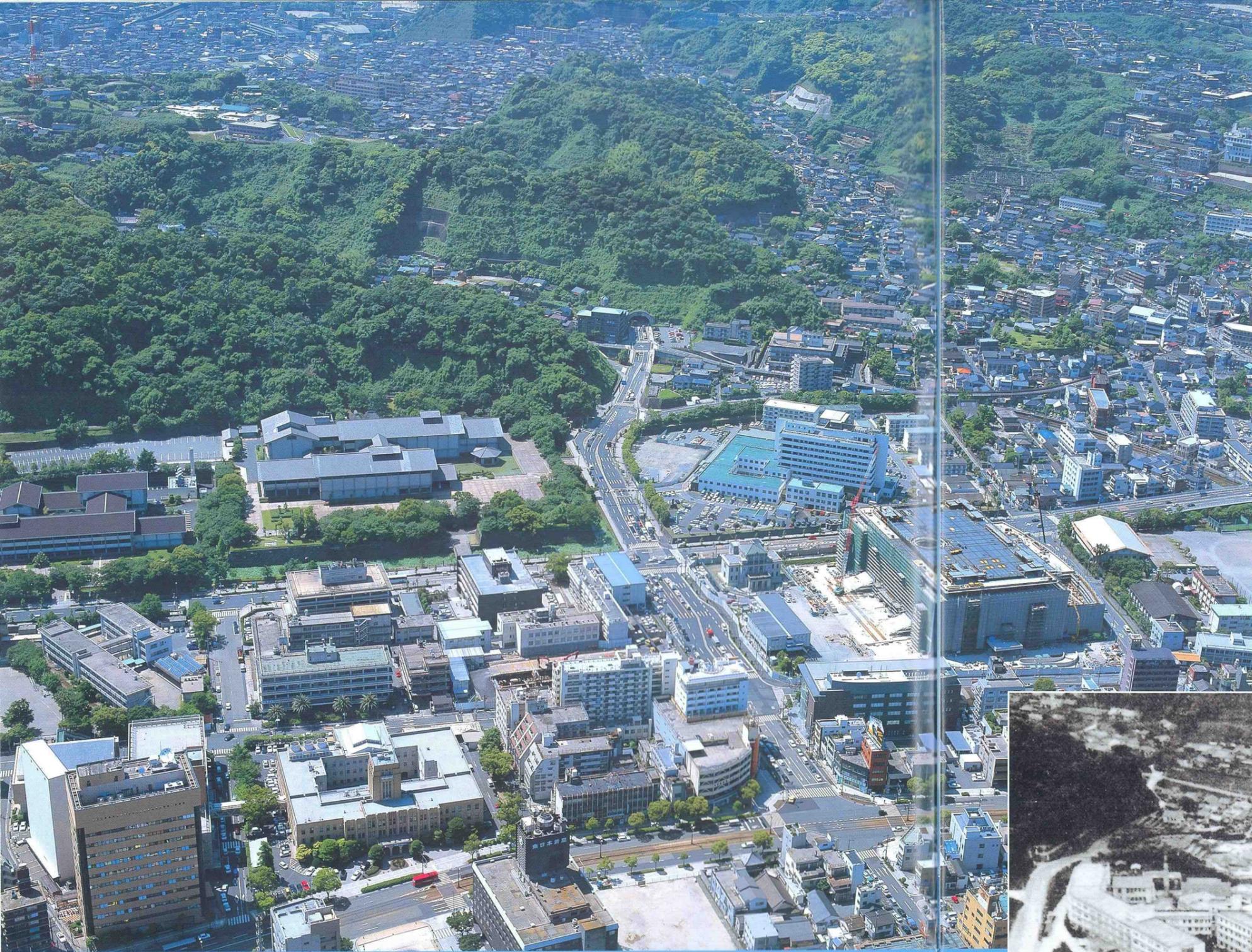
鹿児島市内の七ツ島サンライフプール西側の台地で見つかった「草野貝塚」という遺跡からは、今からおよそ3500年前の人々の生活の様子が分かるさまざまなものが発見されました。

当時の人々が煮炊きをするためなどに使った「縄文土器」もたくさん見つかりましたが、その中に少し変わったものがありました。それがこの写真の土器です。

この土器は、皿形の器に台がついているので「台付皿形土器」と呼んでいます。豪華な文様が施されていて、文様の溝の部分に赤い絵の具がぬってあつたりするところから、祈りや祭りなど特別な時に、お供え物を入れるなどして、使われたものではないかと考えられています。

じつと観察していると、祈りをささげている縄文人の顔のようにも見えませんか。

(ふるさと考古歴史館 古澤 生)



昭和36年当時の城山・山下付近

「城山・山下付近」

城山の麓に、官庁街と文教施設が広がっています。

平成8年11月に県庁が鴨池新町に移転し、跡地にこの4月「県民交流センター」がオープンします。また、旧県庁舎前の自治会館跡には、「市民福祉プラザ（山下分行舎）」が設置され、鹿児島市のポランテア拠点として、毎日多くの市民に利用されています。

この一帯は、古くから鹿児島県の行政の中心地でしたが、歴史資料センター「黎明館」や市立美術館、かこしま近代文学館・メルヘン館などが整備され、西郷銅像や鶴丸城跡などの史跡とともに、鹿児島市の歴史・文化ゾーンを形成し、年間を通して多くの観光客が訪れています。

城山自然遊歩道を散策する人も多く、市民の憩いの場ともなっています。40年の時を経て街の姿は随分変わりましたが、今も昔も城山の緑が鹿児島市の街並みに落ち着いたたたずまいを与えています。

現在の城山・山下付近

編集発行／鹿児島市広報課

鹿児島市山下町11番1号

電話 216・1133

印刷・レイアウト／渚上印刷株式会社

